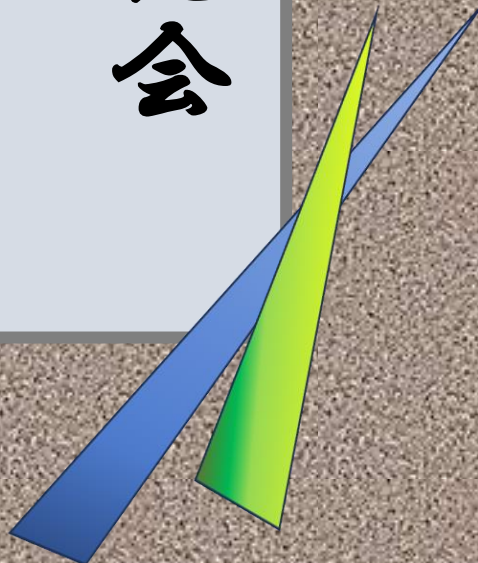




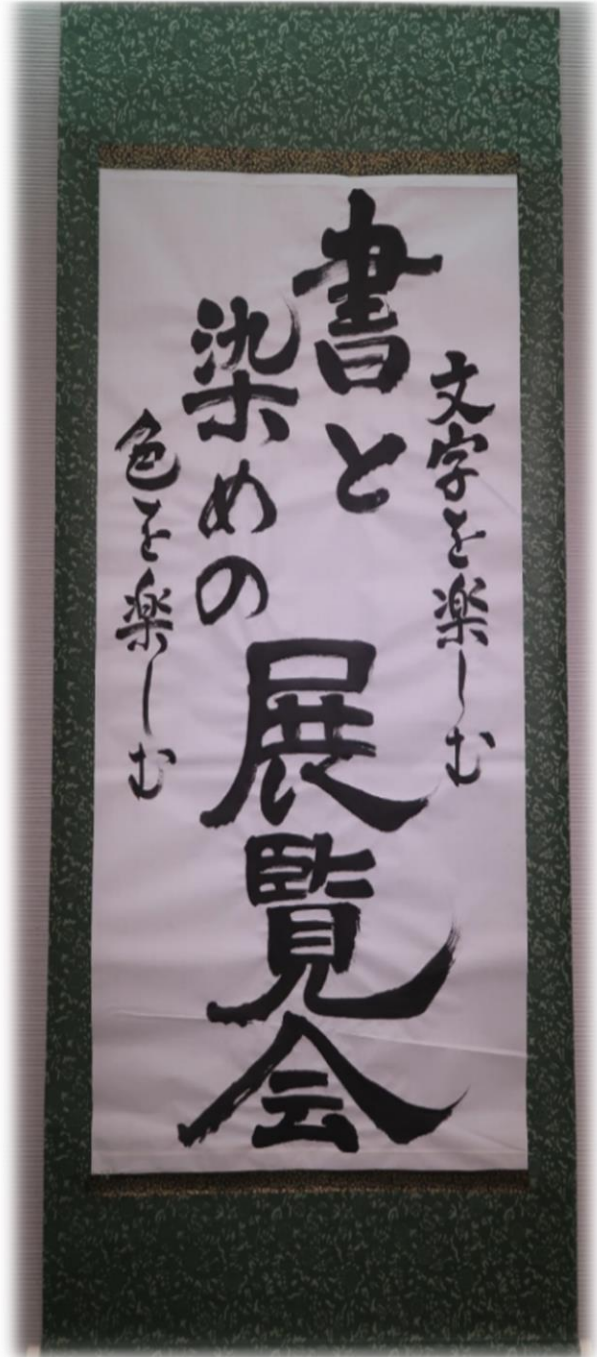
第五回  
書と染めの展覧会

二〇二三年六月二日(金)～四日(日)

ルネ小平展示室









中武 鐘太(小二)



榎本 涼七(小四)



小松 夕乃(幼)

村まより

えの本ころ平

榎本 幸平(小二)

水色の花

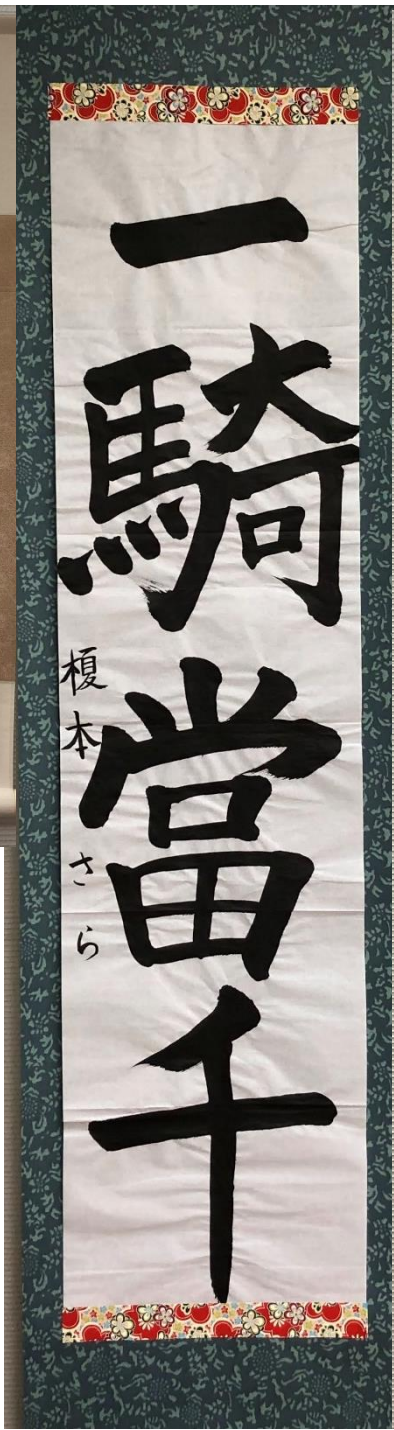
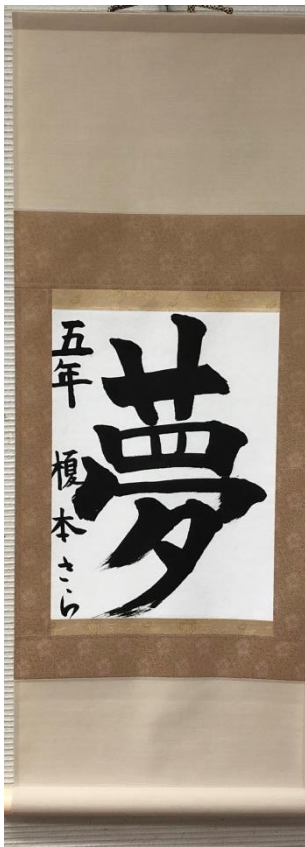
小松 あいり

小松 愛梨(小三)

夢甲子園

藤木 謙心

藤木 謙心(小四)

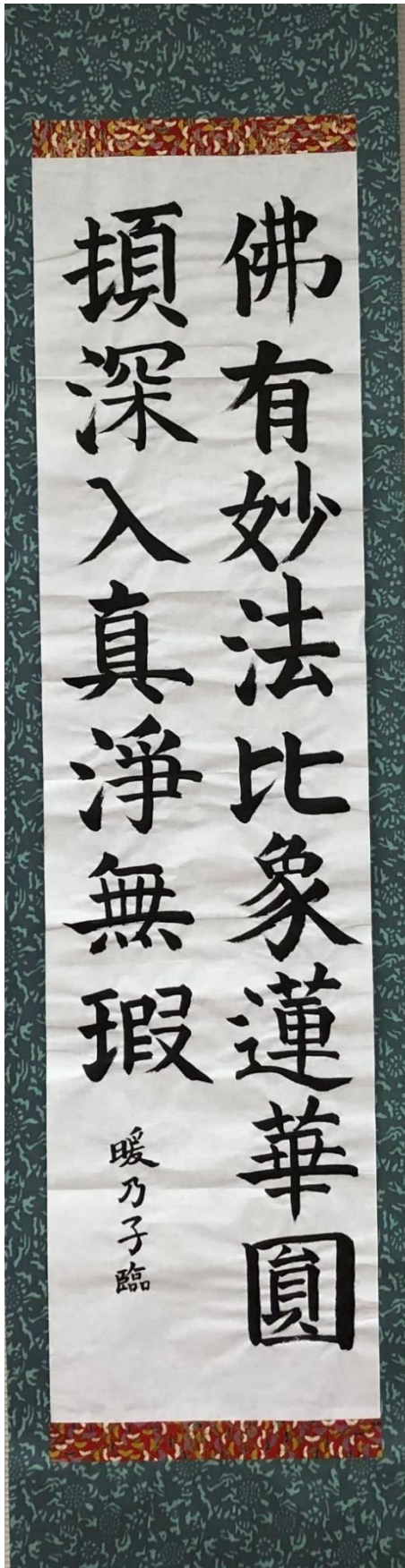


榎本 さら(小六)

高木 奏詩(小四)

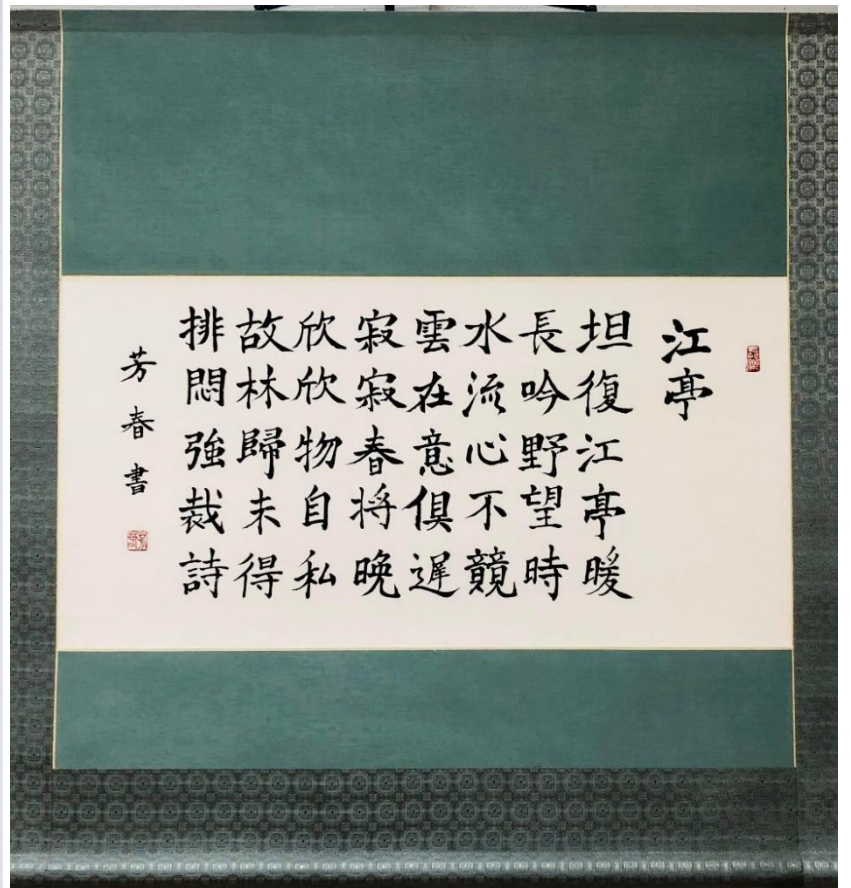
岡野 樹(小四)





村田暖乃子  
たほうとうひ  
多宝塔碑  
節臨  
(高一)

近藤佳奈子  
(中三)



橋本 芳春

「江亭」

杜甫

担腹たんぶくすれば江亭 暖かに

長吟ちやうぎんす 野望やぼうの時

水流すいりゅうれて心競こんきやうはず

雲うん在りて意俱いともに遅おそし

寂々せきせきとして春は將まさに晚くれんとす

欣欣きんきんとして物は自みづから私えす

故林こりん 帰かへること未いまだ得えざれば

悶もだえを排はらい 強しいて詩さいを裁さいす



石川 微秋

「波濤」



石川 微秋 「書譜より」

詎なご若れい巧がく宣を禮うた樂を妙に擬ま神を仙に

なんぞ功こうは礼らい樂がくを宣をへ 妙は

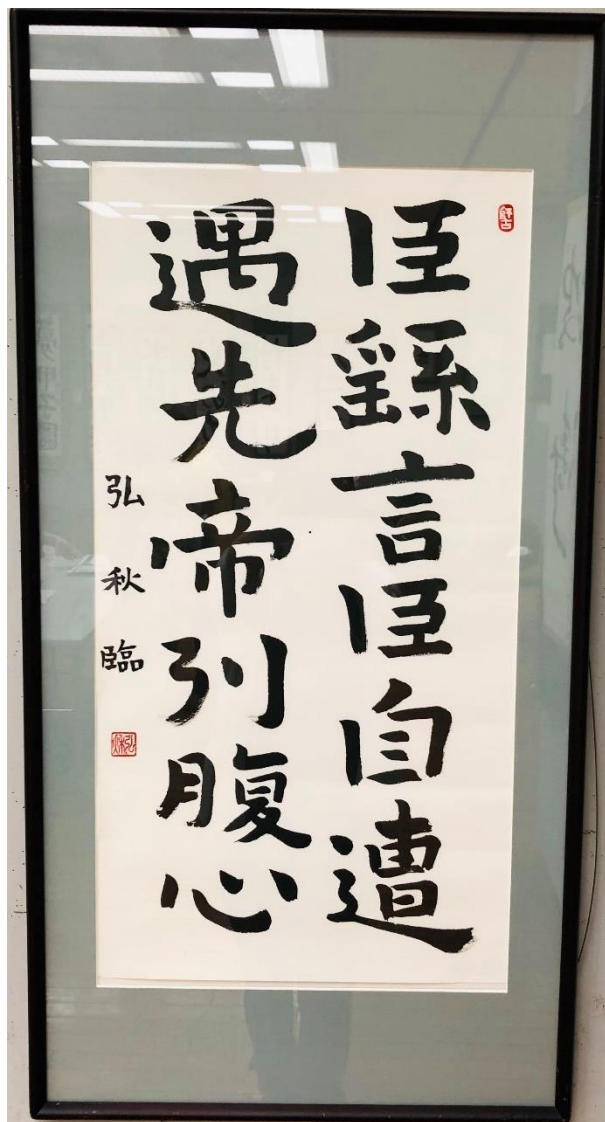
神仙しんせんに擬ぎするに若しからんや







白岩 紅秋「けいふうわちよう惠風和暢」



小川弘秋「せん きちやくひよう薦季直表」冒頭節臨

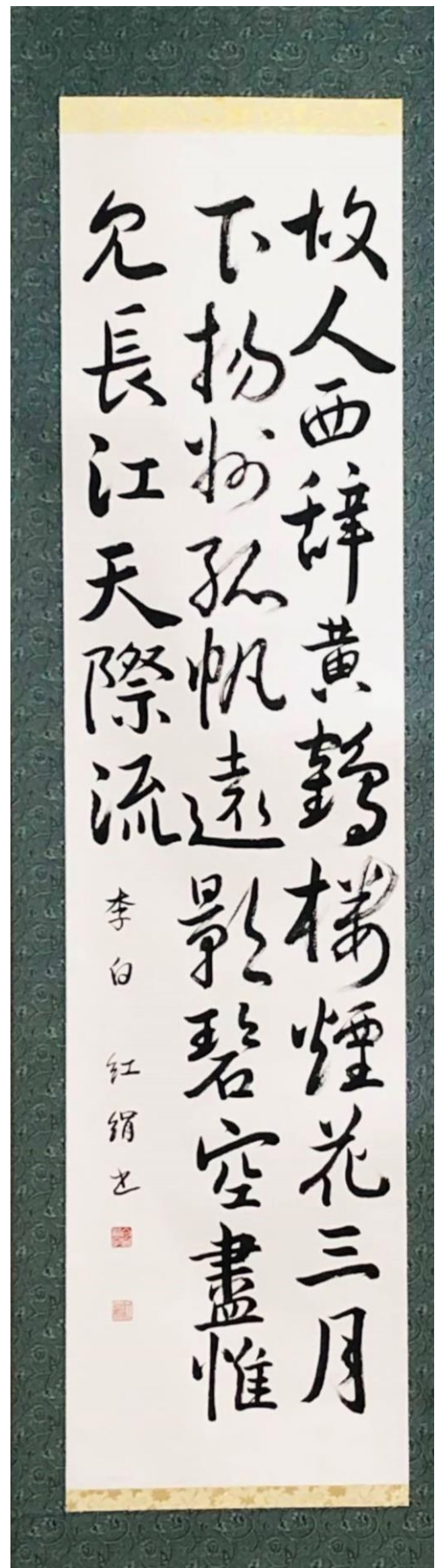
鐘よう(151~230)による季直の推薦文。

字形は隸書の特質を持ちながら、線はふつくと抑揚に富み小楷の模範といわれる。

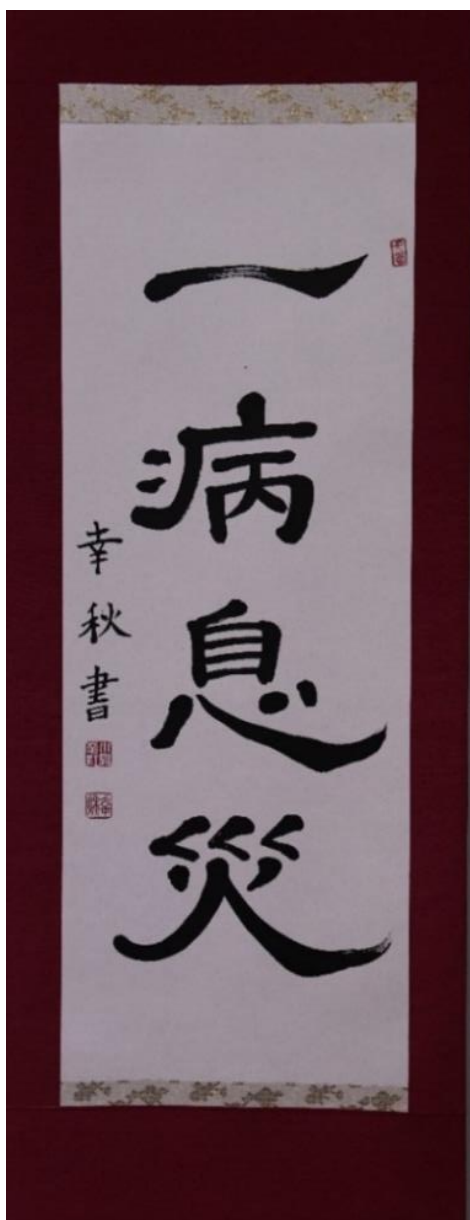
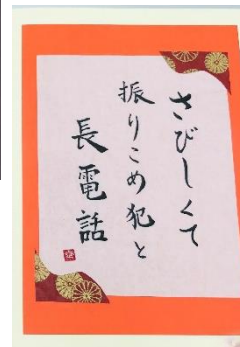
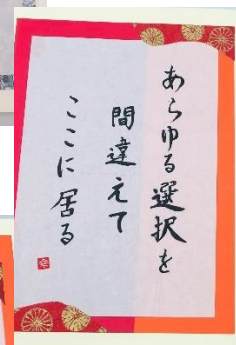
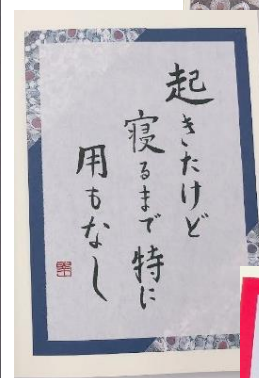
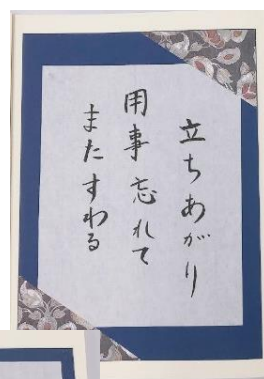
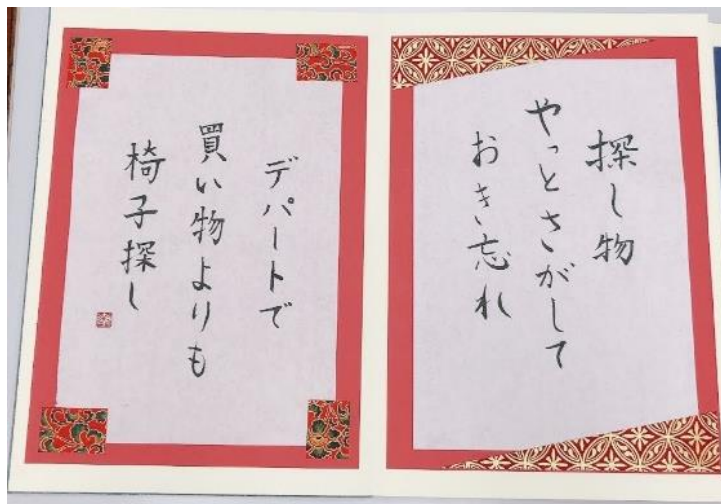
白岩 紅絹

「黄鶴樓にて孟浩然の広陵にゆくを送る」李白

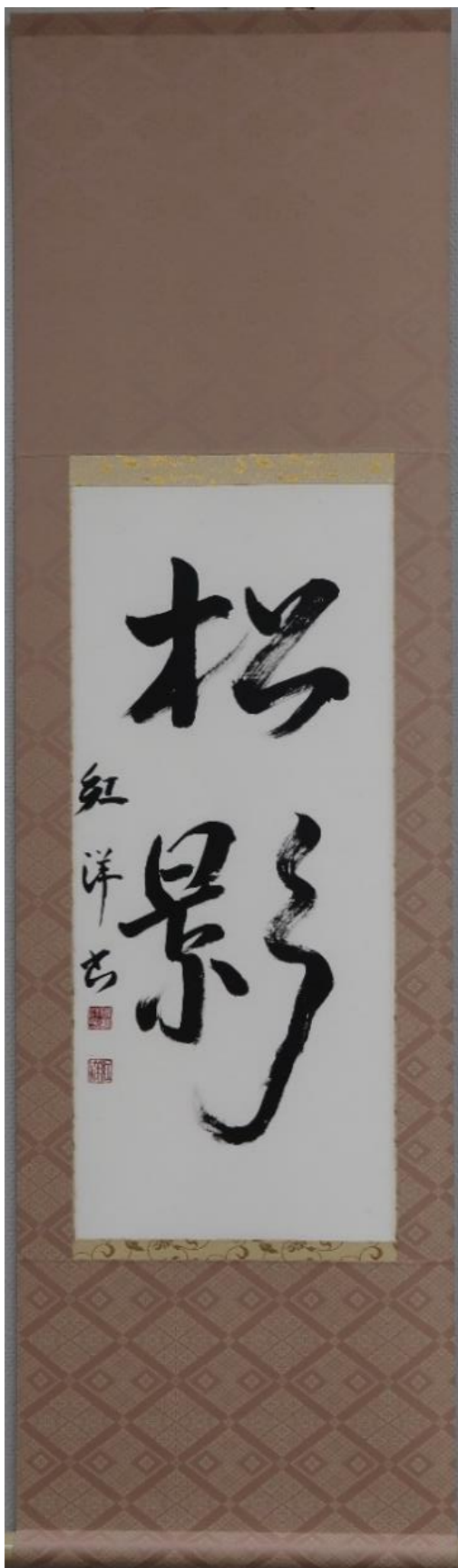
こじん故人 西のかた黄鶴樓を拜し、えんか煙花三月揚州に下る。  
こはん孤帆の遠影  
えんえい碧空に尽き唯見る 長江の天際に流るるを



小泉 幸秋  
川柳集



小泉 幸秋  
一病息災



阿部 紅洋  
松影

友よ  
 月の頃は更なり閑しなかな  
 飛びまはるる西の陣の陣  
 玉は曙  
 やうくあつくなりゆく  
 夕日はまゝありて紫  
 青しつる雲れどゆく  
 夕日花やうまゝて山の端より  
 なるも鳥のれりゆく  
 陽林

冬  
 君のふりたるはつゆあま  
 霜がまのつゆあま  
 言ふに火が  
 きてはつゆあま  
 なりてつゆあま  
 榎火桶の火もつゆあま  
 なるはつゆあま

篠原 陽秋  
 枕草子 冒頭  
 春はあけぼの…  
 夏はよる…  
 秋は夕ぐれ…  
 冬はつとめて…

友よ  
 夏はぎの おぎのふるえももえにけり  
 むれいしどりは天にやあるらん

篠原 陽秋  
 夏はぎの おぎのふるえももえにけり  
 むれいしどりは天にやあるらん  
 重之集より

我やどに  
 降りゆく雪の消えさらば  
 いつしか春と 待たれましやは

香藤 真秋  
 我やどに 降りゆく雪の消えさらば  
 いつしか春と 待たれましやは  
 重之集より



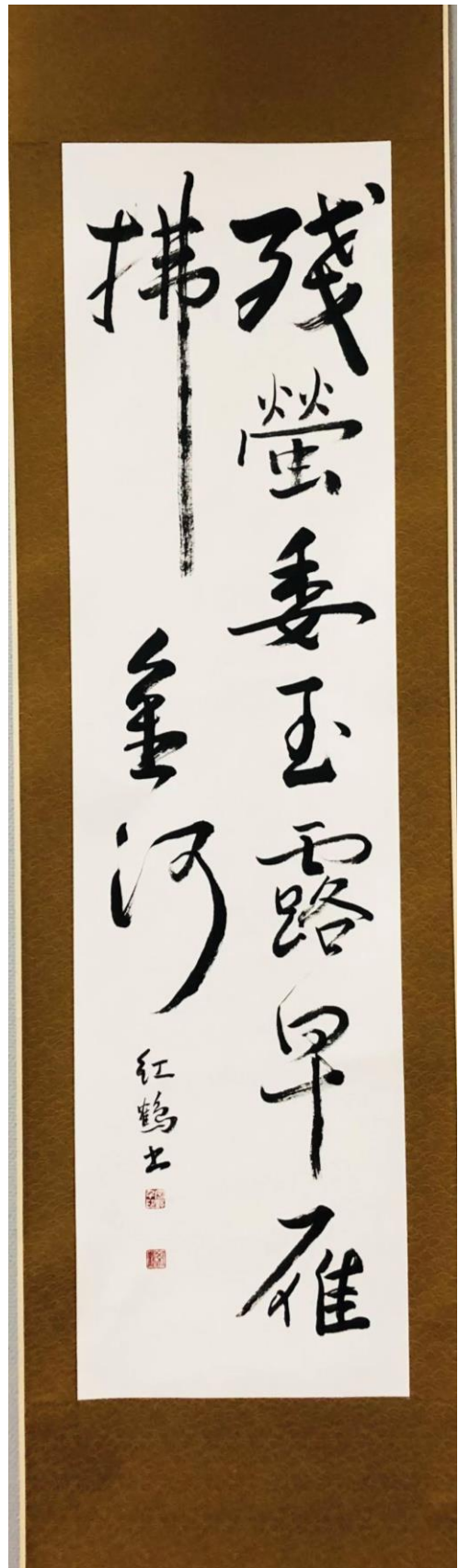
川上 真澄

「麗日 光華を奏す」  
 春の日光のうららかな  
 すべてのものが光り輝く



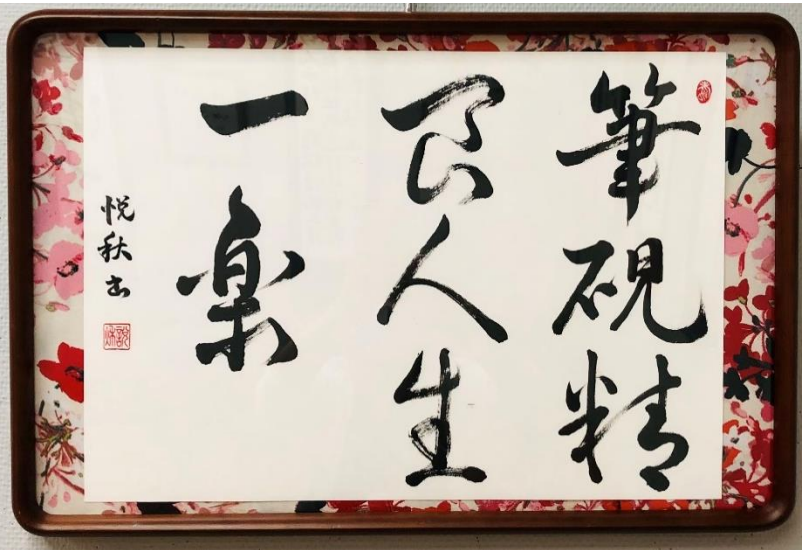
宇野 紅鶴  
 けいふうわちょう  
 「恵風和暢」

「残螢玉露に委し、早雁金河を拂う」  
 夏から残っている螢は、今、露玉と共に消え去り、かわって  
 初渡りの雁が天の川をかすめて飛んでいる。



宇野 紅鶴





小松 悦秋  
ひつけんせいりょう  
「筆硯精良  
じんせい いちらく  
人生の一樂」

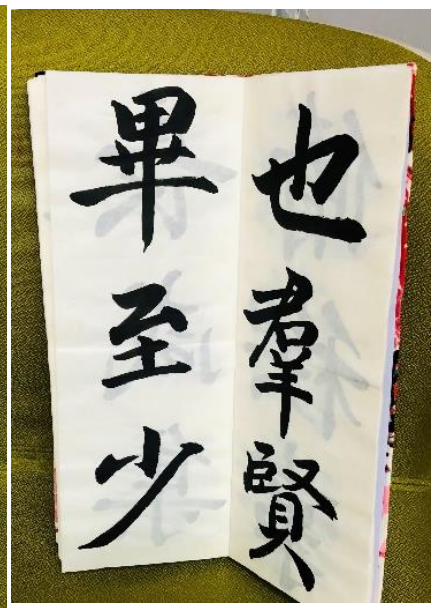
是日也天朗氣清惠風和暢仰  
觀宇宙之大俯察品類之盛

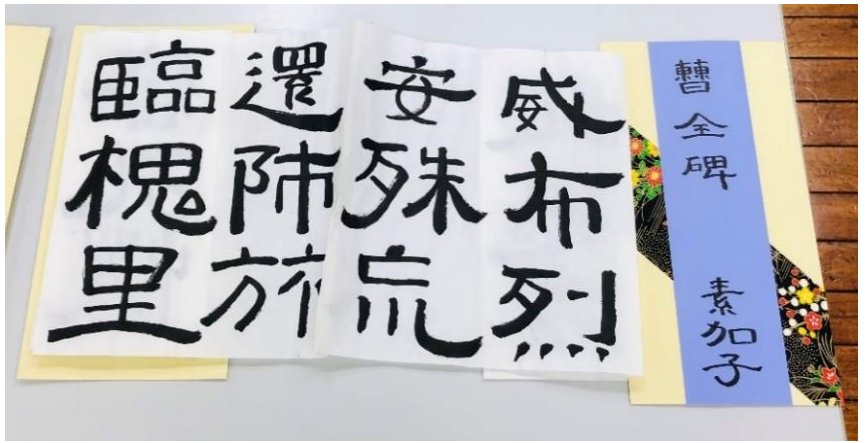
悦秋 志

小松 悦秋 「蘭亭叙」節臨  
この日や 天朗らかに氣清み 惠風和暢す。仰いで宇宙の大を觀、俯して品類の盛んなるを察す。



小松 悦秋  
「蘭亭叙」全臨



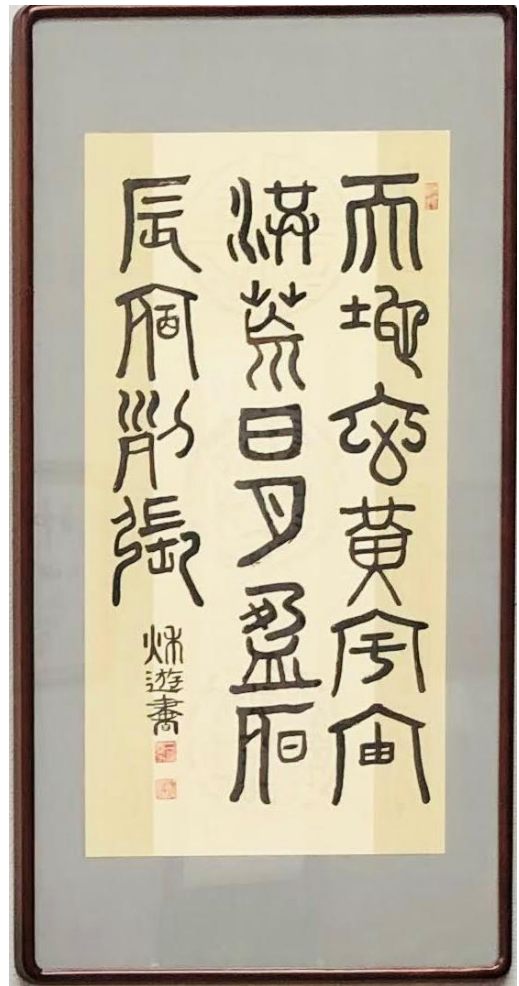


近藤素加子  
「曹全碑の辞」全臨



二瓶秋遊 あいこしんむじん 「愛子心無盡」

子を愛する心は尽きることがない。

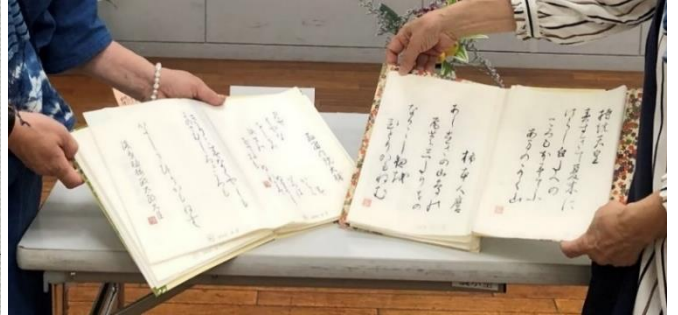
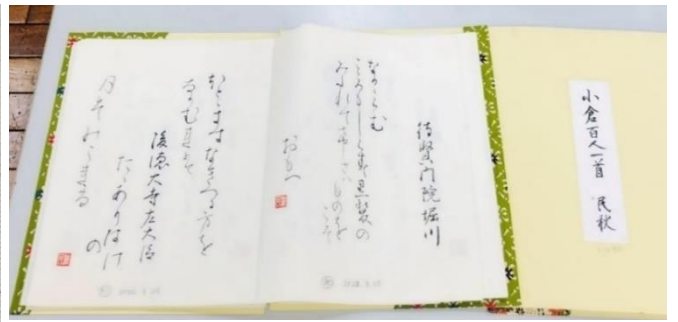
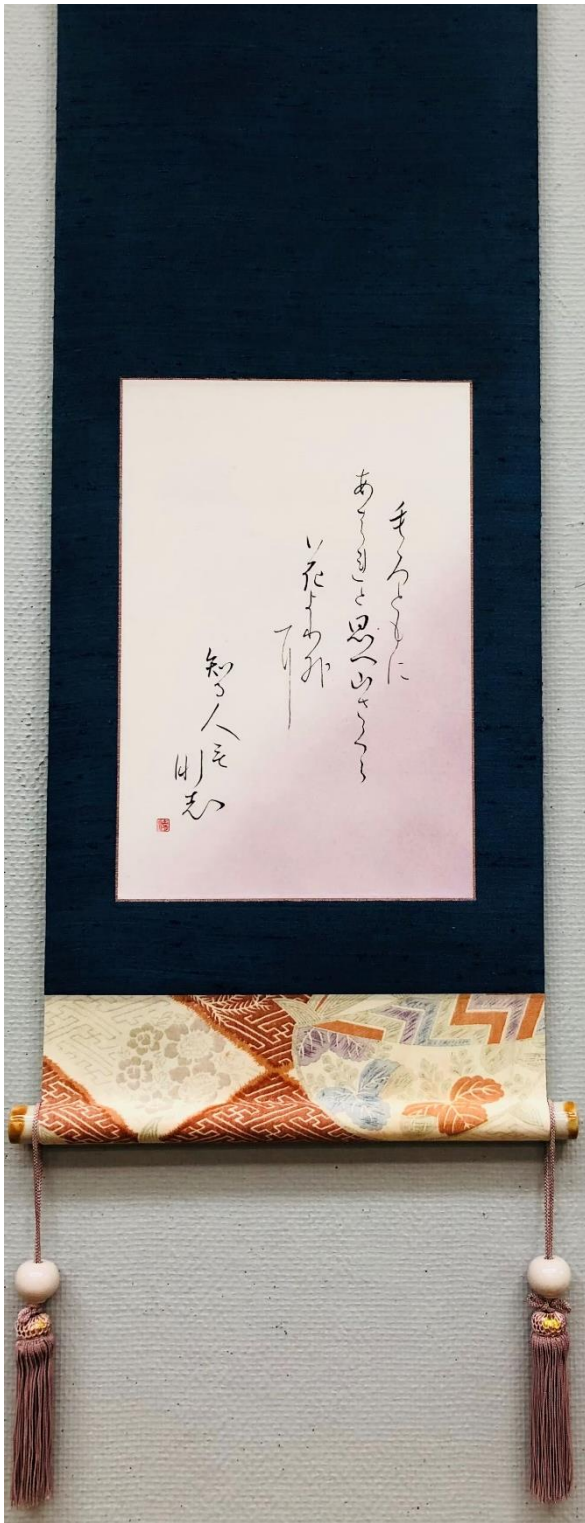


二瓶 秋遊

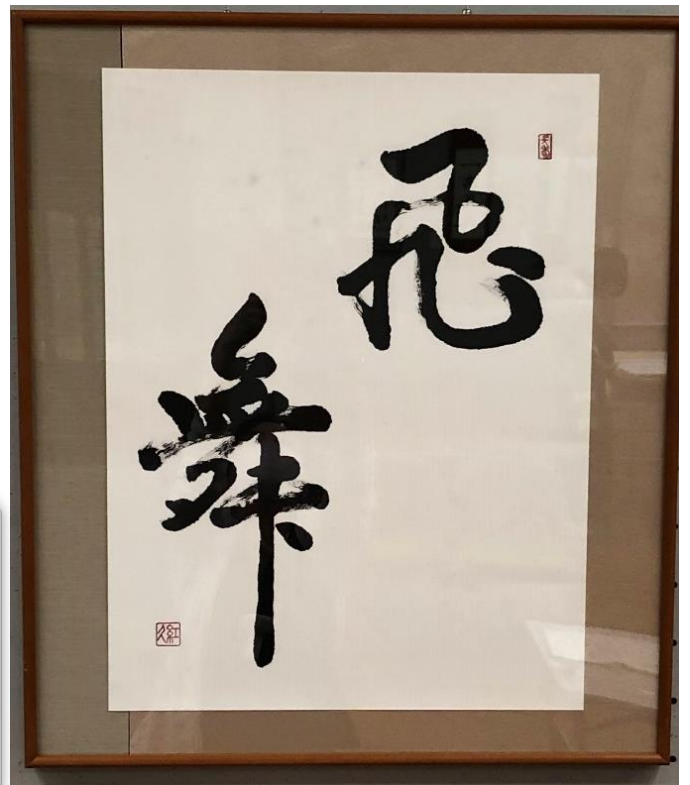
千字文より

てんちげんこう うちゅうこうこう  
「天地玄黄 宇宙洪荒  
にちげつえいしやく しんしゆくれつちよう  
日月盈昃 辰宿列張」  
天はくらく地は果てしなく  
広い。日はのぼり、西に傾き、  
月は満ち欠ける。星は星  
座に宿り並び広がる。

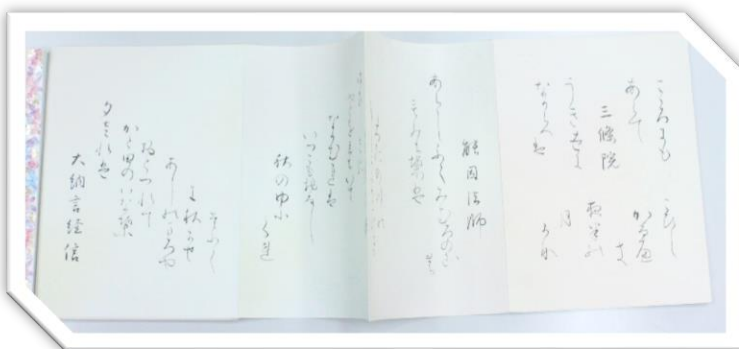
横橋湖秋 「もろともにあわれと思え山桜花よりほかに知る人もなし」 大僧正行尊



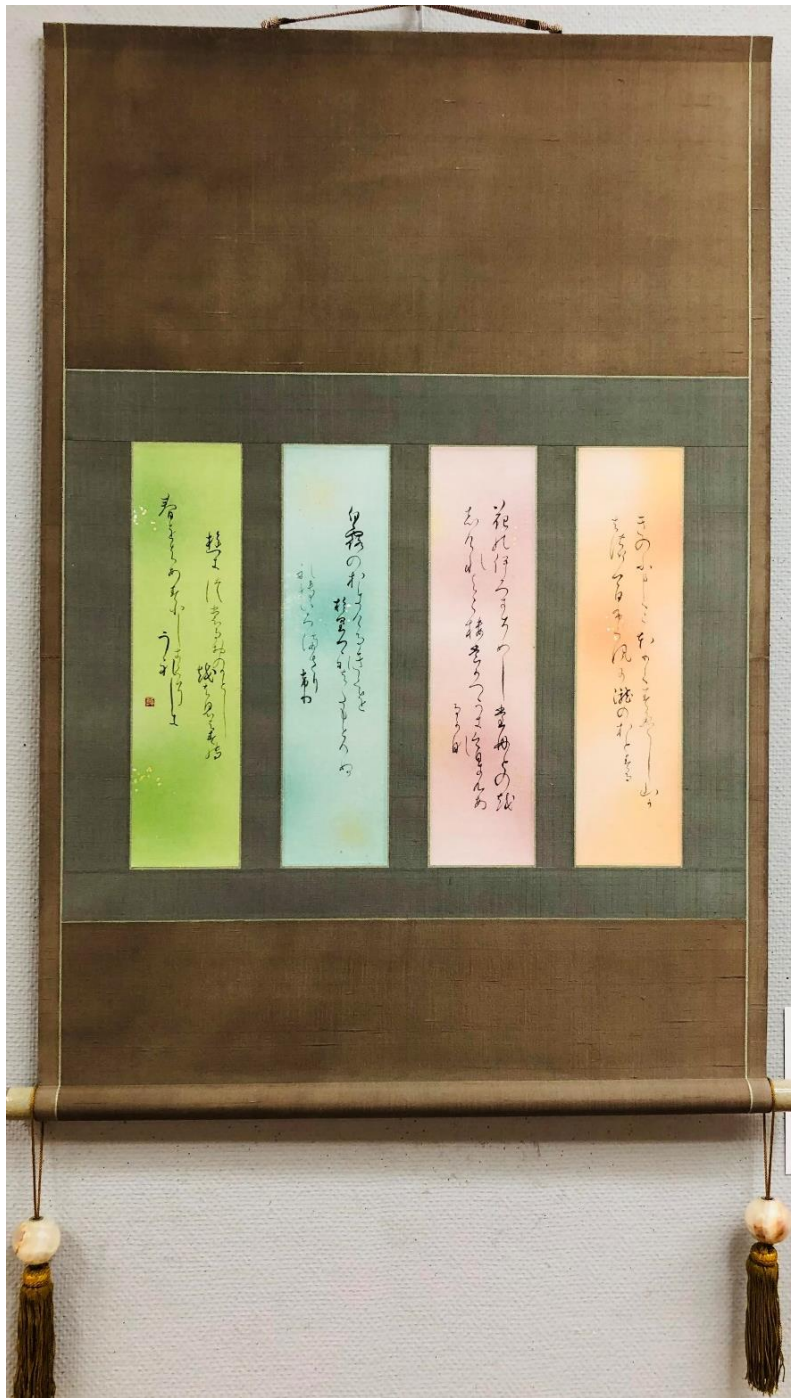
渡邊民秋  
田中塊堂 百人一首全臨



松永紅久  
「飛舞」

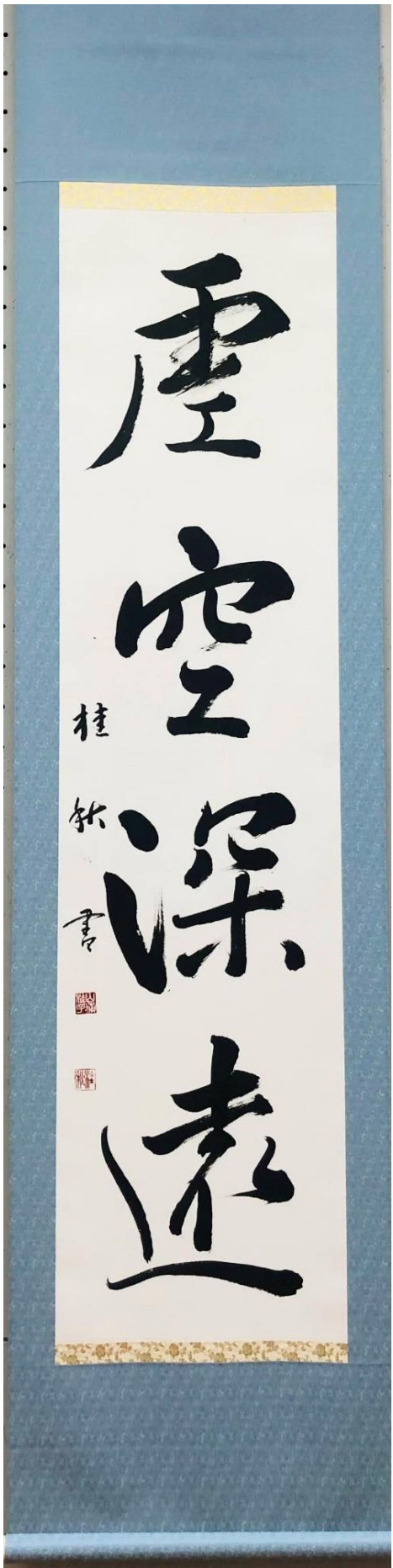


横橋湖秋  
田中塊堂 百人一首全臨



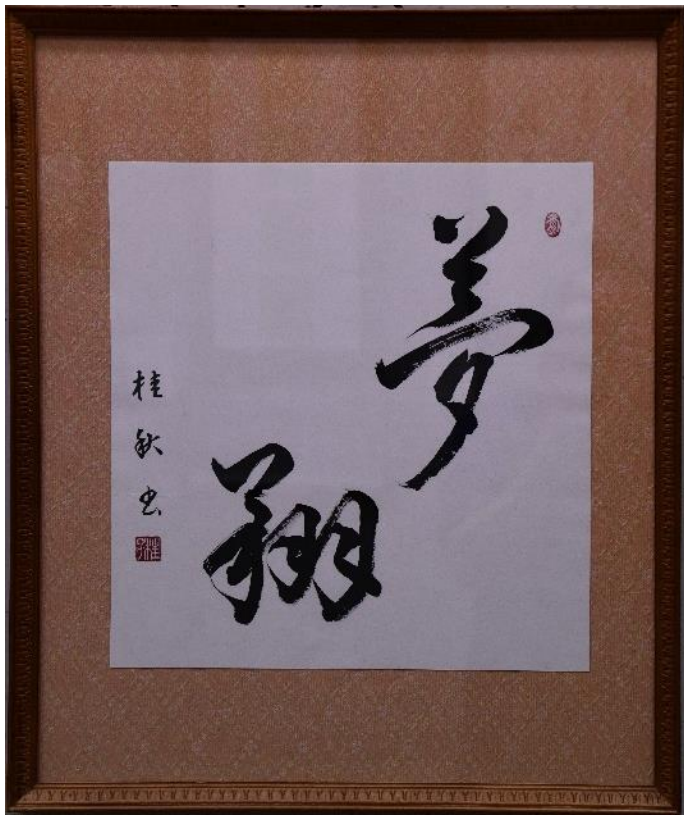
木暮 明秋 「重之集より」

春きのふまでこほりて みえし山かはの  
 今日ふく風に たきのおとする  
 夏花のいろに そめしたものをしければ  
 ころもかへうき今日にもあるかな  
 秋 白露のおきけるきくを おりつれば  
 たもともぬれて いろまさりけり  
 冬 ゆきつむる おのがとしをば思はずて  
 春をば あすときくぞうれしき



山浦桂秋 「虚空深遠」  
こくうしんえん





山浦 桂秋 ゆめ か 夢翔ける



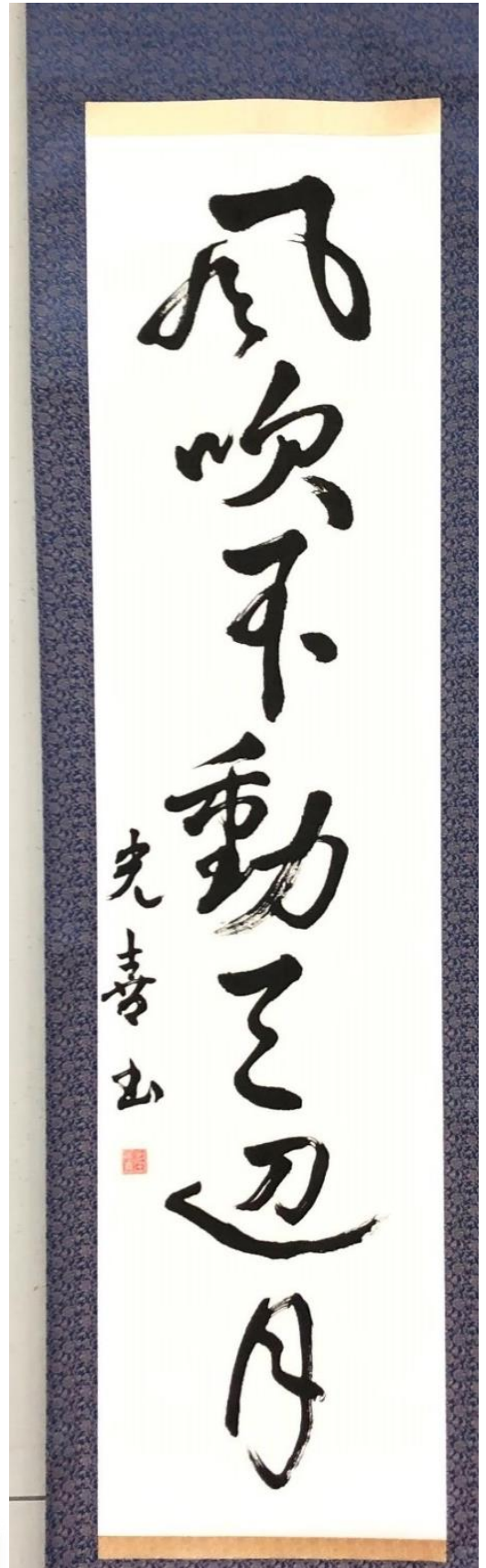
山浦 桂秋 般若心經

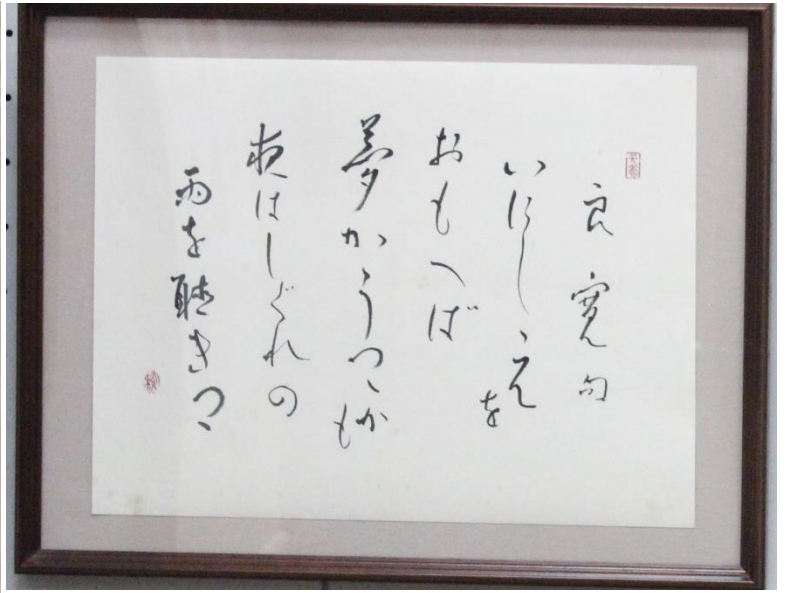


和田 秋峯 天行健

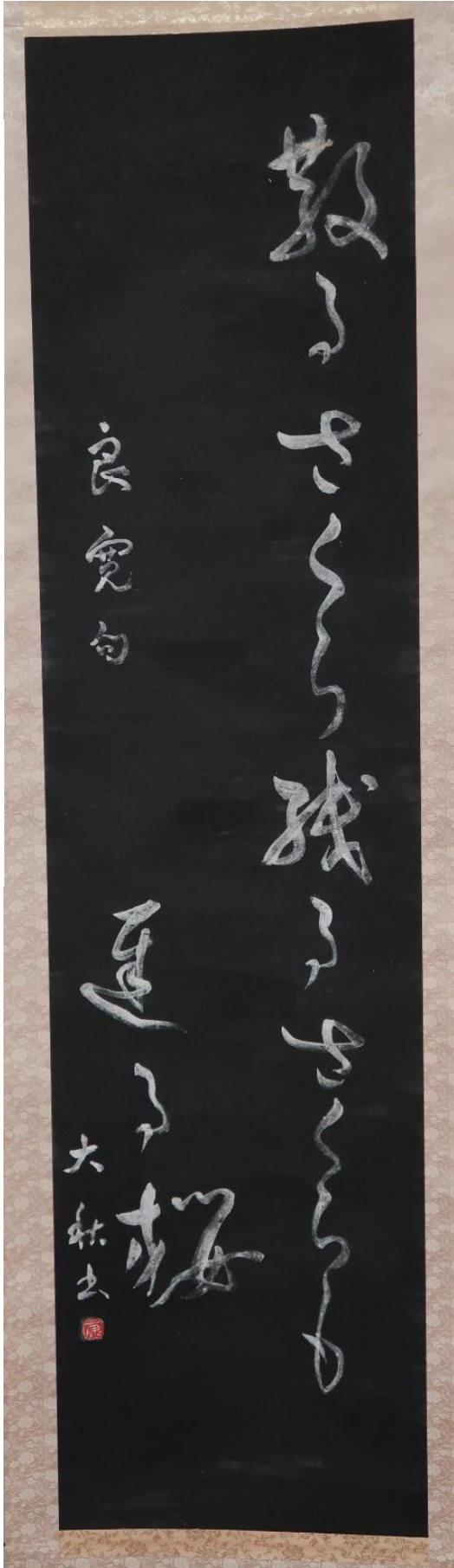


和田 秋峯 風吹けど不動天辺の月

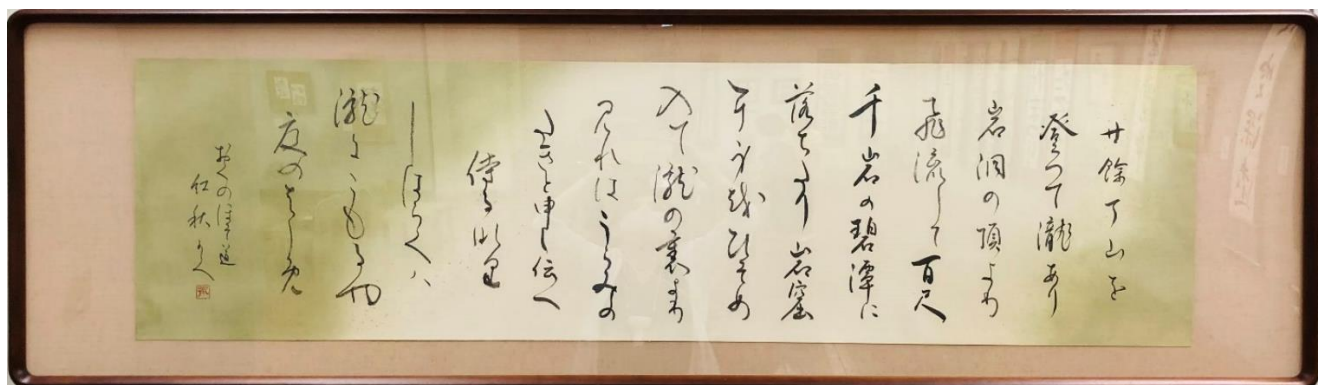




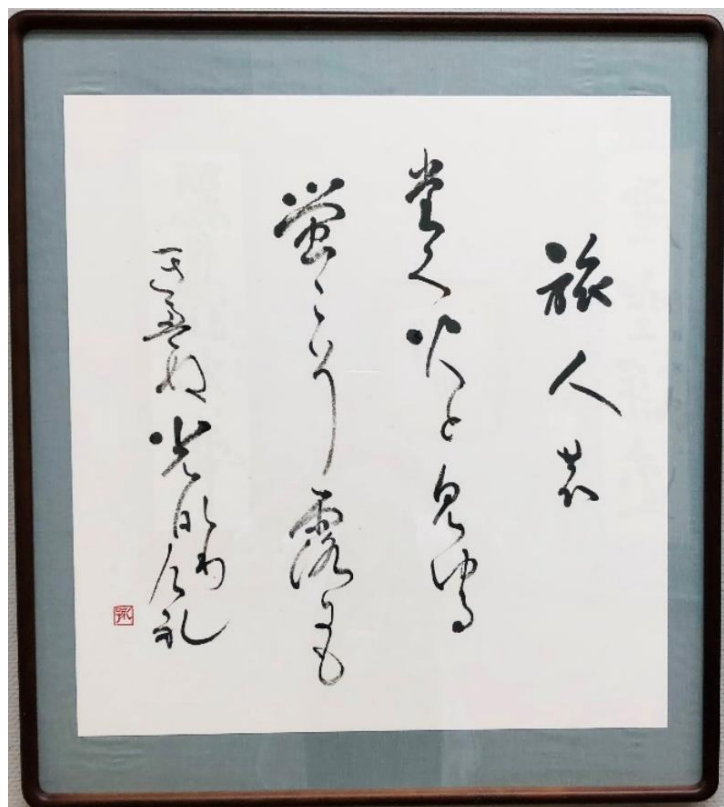
関戸 大秋  
良寛句  
いにしえを  
おもへば  
夢かうつかも  
夜はしぐれの  
雨を聴きつつ



関戸 大秋  
散るよくら残るよくらもちるよくら



松尾芭蕉 おくの細道より 日光裏見の瀧で詠む

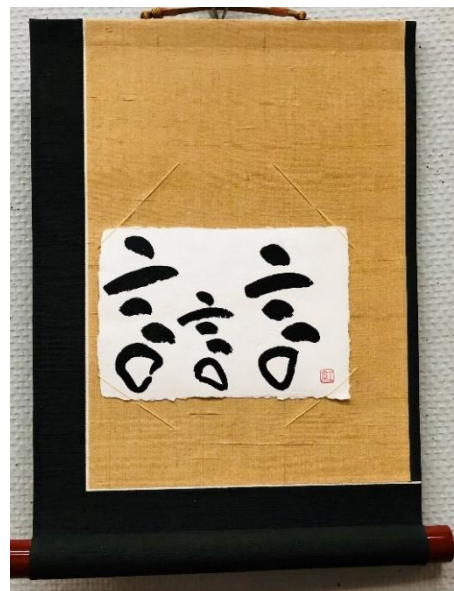
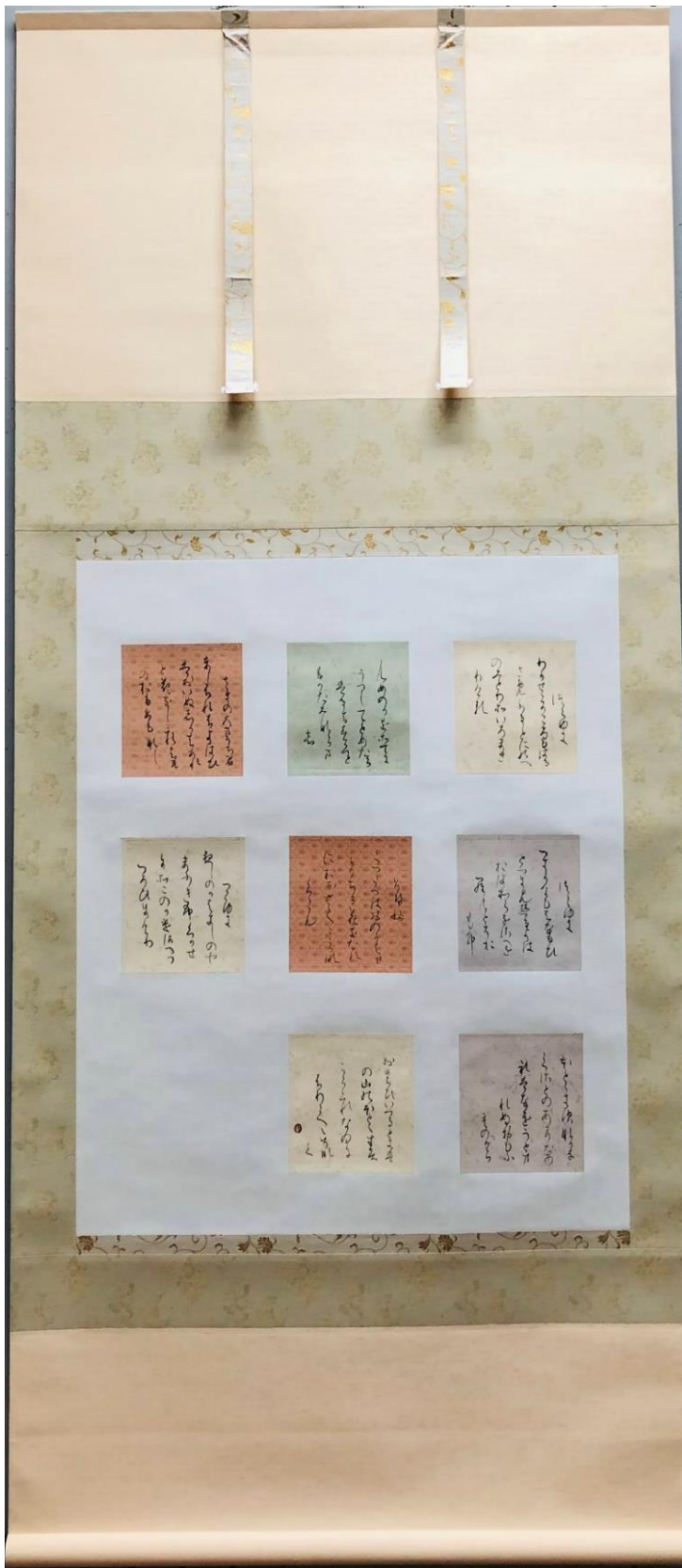


旅人の炊く火と見ゆる螢こそ  
露にも消えぬ光なりけれ 重之集より



「升色紙」臨書





遊び文字「かたらい」

「寸松庵色紙」臨書



# ＊作者と作品＊

小松 夕乃 「たろう」

榎本 涼七 「美しい心」

中武 鐘太 「火の力」

榎本 幸平 「村まつり」

小松 愛梨 「水色の花」

藤本 謙心 「夢甲子園」

岡野 樹 「全員野球」

高木 奏詩 「流星群」

榎本 さら 「一騎当千」「夢」

近藤 佳奈子 「伝統芸能」「挑戦」

村田 暖乃子 「春光」「多宝塔碑」 節臨

橋本 芳春 「江亭」(杜甫)

石川 徹秋 「波濤」「書譜」 節臨

白岩 紅絹 「黄鶴楼送孟浩然之广陵」(李白) 「惠風和暢」

小川 弘秋 「薦季直表」 冒頭節臨

小泉 幸秋 「川柳集」「一病息災」

阿部 紅洋 「松影」

篠原 陽秋 「春はあけぼの やうやう白く…」(枕草子第一段)

斎藤 真秋 「我がやどに ふりくるゆきの…」(重之集より)

宇野 紅鶴 「残螢玉露に委し早金河を拂う」「惠風和暢」

川上 真澄 「麗日癸光華」

小松 悦秋 「筆硯精良人生の一楽」

「蘭亭叙」全臨 「蘭亭叙」 節臨



近藤 素加子 「曹全碑の辞」 全臨  
二瓶 秋遊 「天地玄黄宇宙洪荒…」 (千字文より)

渡邊 民秋 「愛子心盡」

松永 紅久 「百人一首全」

横橋 湖秋 「飛 舞」

木暮 明秋 「もろともにあはれと思へ山桜…」 「百人一首全」

山浦 桂秋 「重之集より春夏秋冬」

「虚空深遠」

「般若心経」

和田 秋峰 「夢 翔」

和戸 大秋 「風吹けど不動天辺の月」 「天行健」

「いにしえをおもへば夢かうつつかも」 (良寛詩)

「洗 心」

荒牧 紅秋 「散る桜残る桜も遅る桜」

「奥の細道」より

「旅人のたく火と見ゆる螢こそ…」 (重之集より)

「升色紙」 臨書

「寸松庵色紙」 臨書

「鳥」「瞳」など遊び文字



